

白くひらめく

齊藤 倫子 青森

満開の染井吉野に称讃の反応としてくしやみをひとつ
天秤のゆれがとまつた感じする味見三度目いつもの味に
チューリップチューリップの列風うけてほろろほろろと花らふれあふ
宇宙船のキッチンにある心地せり深夜めざめて水をのむとき
ゴールデンウィーク終はる宵の駅たくさんの手が白くひらめく

なんぢやもんぢや

金子 智佐代 茨城

ハクビシンにはとり十羽襲ひけり水戸大足おほあしの春のみじか夜
なんぢやもんぢや盛りあがりたる白き花近づきて見るはなびら細ほほし
雑木々の林ぬければすがすがと水田みづた五月のひかりを反す
季が来てすずらん、ガーベラ、ラベンダーまるで手入れをせしごとく咲く
散る花のひとつひらのごとむらさきの蝶ふるふると小松菜に寄る

夢はさめても

島本 ちひろ*埼玉

友よりの石鹸ピンクのポンプなり思うよりなお手指に優し
なめくじの兄弟雨の朝八時ブロック塀をゆつくり登る
ドーナツのシール襖に貼りつけて誇らしげなりひとの兄弟
入院の思い出語る四歳はさりんもようのシャツを着ている
洗濯もの干しながら聴く晴れている風が吹いてる「夢はさめても」

ビー玉

水辺 あ お 静岡

畑中の無人踏切まで歩き渡らずもどる春の夕ぐれ
花冷えの夜の天空の暗闇に石びかりして月は動かず
一隅にかたまりをりし扇風機座敷座敷に呼ばれゆく初夏
とらはれてラムネの瓶を抜け出せず空の景色を宿すビー玉
壇の底に少し残れる苺ジャム老い猿のごと指で掬ひぬ

闇の気配

船岡 み さ*三重

全開の笑顔しており幼き日子の描きたる絵の「おかあさん」
三回のいつてきますを時間差に見送る日々がかつてはありき
巢立ちたる子らの部屋にもカレンダーかけてめくって時を動かす
美しき季節いくたび逝かせしや美しき歌作れぬままに
のびるひろくあるくとぶゆれるゆめをみる五月の闇の気配騒がし

会ひたきひと

小野 はつね 兵庫

短か目に髪カットせし襟足のひえびえと夜の桜雨ふる
夜桜へよざくらへ急ぐ人の上をこゑなく二羽の白鷺が飛ぶ
夜桜が青きほむらのごとく立つしんじつ会ひたきひとは亡きひと
大鍋にくわんぐらんと踊り出す友が掘りたる太市おほいち たかん筍
今はただ何も思はずゆらゆらとゆるる吊橋をむかう岸まで

菊さんや

菊山正史* 広島

ワープロで打たれた原稿を先輩の夫人が編んだ十の随想
我のこと曲がつて真つ直ぐと先輩は初めて会った日に宣いぬ
厳罰化進む時代に先輩は非行少年と共に歩まれし
旅先の利き酒会で先輩が名酒と言いしは二級酒ばかり
菊さんや遊びなはれと先輩はからかうように吾を労りき

喪の家

有川知津子 福岡

日にちある人だけのものあかねさす日にちぐすりといふ妙薬は
ブラームスの低く流れるなかに坐す黒腕章の人に案内され
ブラームスが好きだったのか思つたより長く生きたとおもつてゐるか
ほんやりと二度目とおもふ開かないひとのまぶたを長く見るのは
雨音とわがこゑしばし混線す喪の家を出でて傘をひらけば

今日は善き人

新田節子* 宮崎

乾びゆく窪みに嵌まりシカエルの子救い出したり今日は善き人
春寒き坂の下より匂いくるクリームシチューに明るみており
すがすがと散髪したての人多し楠のはな咲く四月歌会
登山好きの恩師の遺影シャンパンを片手に人生悔いなきごとし
母の日に届くきんつば先ず母に供えて告げる子らのすくよか